

同体慈悲の実践者・乾先生

伊 藤 唯 真

(佛教大学学長)

春風駘蕩の雰囲気が漂い、肌の色艶もよかった乾泰正先生。先生の喜寿の佳辰を祝して記念の論集を出すという案内を受け、喜んで一文を草すると返事を出して間もなく、思いもかけない訃報が届いた。まことに無常は迅速。慶祝の論稿、ここに一転して追悼の記となる。ああ。

乾先生は清廉醇厚、叡智内に湛え、温情外に溢れ、早くより司法福祉に献身せられた。先生の履歴書を拝見すると、戦後間もなく少年保護司、保護観察官となられ、また京都少年審判所、京都少年観察所、大津保護観察所、大阪保護観察所などに勤務、昭和四十一年三月より徳島保護観察所長、同四十四年三月には奈良保護観察所長に就任、同五十一年三月近畿更生保護委員会委員を最後に退官、同年四月には法務省より永年勤続表彰を受けておられる。

思うに、事犯者の更生保護ほど献身を必要とするものはない。もし保護観察官が事犯者に対して適当に接触しているだけなら、事犯者が真に更生するところまではいかないであろう。口はばった言い方で恐縮するが、保護司・保護観察官側に事犯者と同じ立場に立つて傷みを分けあう姿勢がなくてはならないし、相手の心をわが心とする一体感があってこそ心の交流が始まるのではなからうか。

仏教には「同体慈悲」「同体大悲」という言葉がある。菩薩が、衆生と自己とは同一体である、とみて起す大慈悲心のことをいう。保護観察官らが同体の慈悲を抱かれるからこそ、事犯者の心に響くものが生じ、矯正が可能となる。すぐれた矯正、保護更生には、かかる宗教者の心情が介在している筈である。

乾先生は保護觀察官たる前にすぐれた宗教者であつた。ご承知のように、先生は奈良市聖光寺のご住職でもあつた。「同体大悲」の心をもつ宗教者であられたればこそ、先生の永年勤続もまたありえたことと思う。三十年に垂んとする永年勤続は、まさに「同体慈悲」「同体大悲」の菩薩行の年月であつたといえる。本當に尊い永年勤続であつた。

先生は退官後の昭和五十一年四月より本学佛教社会事業研究所の主事となられ、平成元年三月同職を辞任されるまで、十四年の長きに亘つて同研究所の運営、諸事業の推進に尽瘁せられた。またこの間、佛教大学の非常勤講師を兼務、司法福祉論を講ぜられた。龍谷大学にも出講され、矯正講座を担当されている。

佛教社会事業研究所では機関誌として「佛教福祉」を発刊している。乾先生の編集になるものである。先生は各号に福祉関係の施設などを報告されているが、第十三号（昭和六十二年三月刊）には「近世儒家の佛教觀と福祉觀」、第十四号（昭和六十三年三月刊）に「少年保護事業史上の佛教者について」という論文を発表されている。

前者を先生は老書生の論文と謙遜されているが、このなかで、儒者の佛教徒に対する批難を「遠い昔のことと考えてはならない」と指摘し、さらに、

現代の經濟高度成長の波に乗つて仏教寺院も伽藍の復興や法要の華麗は目をみはらせるが、その外飾の内面で、凡ての僧侶自身が自己の生活を謙虚に内省し、もっと真剣に自覺覺他に努め、社会情勢にも洞察対応しなければならぬ時が来ているのではなからうか。

と警告されているのは貴重である。亡き先生の提言は、現今の僧侶を痛打される警策として、吾人は嚴肅に受けとめねばならない。

後者は、次第に忘れ消え去られつつある仏教者経営の少年保護団体について述べられたものである。保護事業に対する仏教者の思想的基盤を明かし、矯正には仏教精神が必要とされることを力説されている。

これらの代表的な二論文において、先生が心に留めておられたものが、仏教を愛するが故の現状批判であり、また保

護事業における仏教精神の再認識についてであったことがわかる。仏教の形骸化に歯止めをかけ、その活性化を図ると
いう課題をもつ吾人は、乾先生の遺業から多くのものを学びとらねばならない。先生の心を心とすること、これが先生
の恩徳に報ずることになる。今は先生の金蓮台上よりのお導きを請うのみである。